

## 「漂流物」 赤碕保育園（鳥取県東伯郡）

子どもたちが、海について話しているのを聞いていると、遠足やヤドカリ捕りに行った三度笠の海が、子どもたちにとっての海になっているのに気がついた。そこで、赤碕町（現在琴浦町）内にある別の海岸にも出かけていき、色々な環境の海があることに気づいて欲しいと願った。また、一人ひとりの楽しみや発見から、友だちと協力して世界を広げていく楽しさを味わって欲しいと願った。今回行った海は、勝田川河口で、岩場であり、漂流物もたくさん流れ着いている場所で、三度笠の海とは、様子が大きく違う海である。（4、5歳児）

・保育士の願い、援助、環境構成 ○子どもの姿・つぶやき、発言

### 1. これはなあに？（7月9日）

・保育士が、海の下見に行った時に拾った漂流物を、子どもたちに見せて、「なんだろう？」と投げかけてみた。

○漂流物の、真ん中のマークに注目して、「工事(現場のマーク)みたい」「病院(のマーク)みたい」また、文字に注目して、「何ってかいてある?」「韓国語じゃないの」「船に引っかかってきた じゃない」「看板だと思う」「(上下が)反対じゃない?」

など思うことを話した。

・子どもたちの、なんだろう?という思いや、～じゃない? という想像の世界を大切に受け止め、より深く海を観察しようとする気持ちを育てたい、子どもたちの言葉より、外国とのつながりを知るきっかけを作りたいと願った。



○この後、勝田川河口に出かけた。ここでは、波で石が動かされ聞こえてくる音に気づいたり、海水が川の方へ逆流したりしていく様子に気づき、その様子を見ることが出来た。また、「この海は、三度笠の海とつながってる」と話す子がおり、どうしてそう思うのか聞いてみると、「おんなじで、つながるとおもう」との返事だった。

・保育士は、別の海という感覚を持っていたが、子どもの中にはつながりを感じる子もあり、こういう感覚に寄り添って保育するように心がけていった。

### 2. 「あつたー!!」

・岩場では、石と石の間などに、たくさんのごみや漂流物があり、保育士は危険のないように見守りながら子どもたちの発見や言葉に注意を傾けた。

○岩場を歩きにくそうにしていたが、足元に気を付けながら、目に付くものを見たり拾ったりしていた。途中「あつたー」の大きな声が聞かれ、ハンゲル文字の書かれたペットボトルを見つけたと、知らせていた。「朝の会で見た時とおんなじ字が書いてあるなー」「何がはいつとっただろう?」とその言葉を聞きつけ、他の子どもたちも落ちている物をさらによく見ていた。

・ハンゲル文字の書かれたポリタンクも見つけてきたが、中に何が入っていたのか安全性が確認出来にくい物だったので、子どもたちにそのことを伝え、写真を撮って記録に残しておくことにした。他、誰かが食べて捨てたであろう、サザエの貝殻や、ひも、壁のタイルなど、子どもたちが見つけたものを持ち帰った。

### 3. ハンゲル文字（8月2日）

・持ち帰った漂流物は、子どもたちの興味が広がるよう、手に取って見たり触れたりできるよう、部屋にコーナーを設けて、展示しておいた。また、ヤドカリグループの友だちと図書館に出かけた時に借りてきていた、韓国語の辞書も用意しておいた。辞書は、意味を調べて知るというより、これからの活動のきっかけになることを期待して、そういう本があることを知らせると、借りることになった。

○毎日のように、漂流物のコーナーでは、物を手に取り友だち同士で話したり、韓国語の辞書を開き、漂流物に書いてある同じ文字を探し、同じ文字があると保育士に知らせたりする姿が見られた。初めて、黄色の看板を見たときに増して、想像が膨らみその物に関わる意欲が見られた。そこで、「なんで、あそこにこのペットボトルがあつたのかな?」と投げかけてみた。「ながれてきたんじゃないの」「どこから?」「韓国…?」

・漂流物に興味を示し、看板を始めて見たときに韓国のことを話したM子を中心にして、6名のメンバーをひとつのグループとして、活動を展開していくことにした。前に話した時にも、韓国のことがでてきていたので、韓国の場所を探して見ることを提案した。そして、世界地図、地球儀を準備した。

○世界地図では、M子が日本の場所を指差し、更に赤碕の場所も指した。韓国はどこか投げかけてみたが、漢字表記でわかりにくかったため、保育士が知らせた。



「近いなー。青いところは、海だよ」地球儀を回しながら見て、韓国と日本を探し出し、「やっぱり、近いなー」「(青い

ところを指差して)ここは、日本海だよ。」保育士「ここから流れてきたのかなあ?」「流れてきたと思うよ」保育士「韓国のことが分かるところがあるって言っとったよな」「ポートのところ」保育士「そこに行ったら、韓国のことが分かるかもしれないよな。行ってみようか?」「行ってみるー!」

#### 4. 日韓友好資料会館に行こう (8月19日)

・ 子どもたちのこれまでの会話を探りながら、資料会館でどんなことを調べたいかを聞いて、まとめていった。

① 拾ってきたペットボトルは、韓国から流れてきたものか? そうだとしたら、ペットボトルには、何と書いてあるのか? (子どもたちの予想では、お酒。これは、匂いをかいでいた)

② 韓国は、どんな国なのか? 食べ物、服、あそび、保育園はあるのか、どれくらい離れているのか?



・ 資料会館の館長さんには、あらかじめ子どもたちが聞きたいことを伝えておいた。

○ 資料会館には、おうちの人と来たことがある子どももいた。しかし、話を聞くのは初めてのようで、難しい言葉が出てきたにもかかわらず、館長さんの話をよく聞いていた。聞きたいことが話の中に出てくると、自分なりに理解したことを、館長さんに確かめるように話す子もいた。

○ ペットボトルは、子どもたちが予想していた通りお酒であり、同じ会社のものが、売ってあるのを見せてもらい「おんなじだー」「やっぱり、お酒だったな」「マーク(会社の)がおんなじだな。」と自慢そうに話していた。資料会館が、建て



られた理由より約200年前船が遭難して、赤碕の海に流されたと聞き(そのことをきっかけに、交流が行われている)、ペットボトルも流されて来たのだという確信を得たようだった。また、韓国までの距離が、約700キロだと聞き、地図を見て近いと思っていたことが、覆され驚いていた様子だった。その他、韓国の人の暮らしぶりを、パネル写真で見たり、聞いたりすることもでき、あそびについては、実際におもちゃであそぶことができ、一番意欲が見られた。また、留守番している友だちにお土産を買ってあげようと、あめを選び買った。

・ ひとつの漂流物から感じたイメージを膨らませ、色々な疑問が出てきた。身近な施設に出かけ、調べることで新たな発見があり、自分たちの住んでいる町と、外国の国が海を通してつながっていること知ることが出来たのではないかと考える。

#### <考察>

・ 漂流物に興味を持った子どもを、少人数6名のグループで活動を行ったことで、普段は自分から思ったことを話すことが少ないM子が、知っていることを積極的に話し、そのことを他の友達にも受け入れてもらえ、互いにもっと知りたいという思いにつながったのではないかと考える。M子の姿を通して、子どもにとっての集団とは、自分の思っていることを言え、意見を交わすことが出来る、自分たちで活動を進めていけるなど、自治能力の発揮できる少人数がいいのではないかと考える。

・ 漂流物の活動をするにあたって、韓国という国について調べることになったが、保育士自身が、韓国のことをよく知らず、子どもたちと一緒に楽しみながら、活動することが出来たと思う。

活動する中で、子どもたちは、知らないであろうと決め付けているところがあったが、子ども一人ひとりが、思いもよらないことを知っていることがあり、はっと驚かされることがあった。それは、家族の人のかわりであったり、地域での経験であったりと色々なところで子どもたちは、力をつけているのだと思った。その力を、発揮できる場を作るためにも、保育士は、子どもたちの興味や発達にあった環境を整え、子どもたちが遊びを展開していけるように支えていくことが大切なのではないだろうか。

## みどころ

この事例では、子どもたちの身近な海での経験を活かし、色々な環境の海があることに気づいて欲しいと願いをもった保育者自身が、幼児の興味の対象を広げるための情報を持ち、投げかけてきっかけを作りました。また、一人ひとりの楽しみや発見から、「友だちと協力して世界を広げていく楽しさを味わって欲しい」と願って、友だちに思いを伝え、友だち同士で活動を進められるように、グループ活動を大切にしました。このように保育者が願いを持ち、幼児の実態や反応に添いながら、幼児の視野が広がる環境構成をしたことで、幼児は思い思いに興味の対象や疑問について考えたりかわったりすることができました。そして、言葉や情報でしか知らず目の前に見えない外国と、今の自分たちとのつながりを感じることに結びつきました。日常では廃品として興味を向けることのない物に目を向け、友だちと考えを出し合い、解決できない疑問を持って追究することで、「海」から「世界」へと確実に興味を広げることができました。